

## 伊藤 礼

道楽という言葉の意味は、こころみに新明解国語辞典をひいてみたら、ひとつは「趣味の意の老人語」というのがあったが、もうひとつ「ばくち、女狂いなどの悪い遊び」とあった。当誌の編集部が「道楽者の言い分」という特集に一文を寄せて欲しいと言ってきたとき、わたくしはなんとなく決まり悪そうな口ぶりを感じたのであったが、原因は道楽に「悪い遊び」の意もあつたためだろう。あなたを道楽者と見込んで原稿をお願いしたいというのは言いにくいのである。

編集部がなぜわたくしを道楽者と考えるのか。これには根拠がある。わたくし自身が書いた書物があつてそれが根拠なのである。たとえば『たぬきビール』という書物を見るとわたくしがたぬきを捕まえて焼肉に

という男は農作物に多大の時間と金銭を投じながらあまり成果を得ていないのに平気でいる。この男は道楽者だな、と考えるに至るのである。

しかしながらいま八十二歳、人生の終わりに近づいて振り返ってみると私とて最初から道楽者であつたわけではない。若い頃はむしろ真面目な堅い人間だつた。それが途中からふにゃふにゃになつたのである。

いまじつと考えてみると、わたくしが道楽者になつたきっかけは病氣だつた。そう思わざるを得ないのである。病氣とは結核である。二十一歳、大学三年生の時わたくしは咯血したのである。そのときわたくしはやせ細つた体重四十六キログラムの青年だつた。昭和二十八年だつた。それから療養生活が始まつた。これをきっかけにわたくしは真面目な向学心に燃えた青年から道楽的な人間にじわじわと変化していったのである。

結核というのは恐ろしい伝染病だつた。以前は若い人が罹ると半分ぐらひは死んでしまつた。結核になつたというこははずれ近いうち、わたくしが死んでしまふということだつた。両親にとって嘆かわしいこと

して、それを食べながらビールを飲んだからすなわち胃袋の中にたぬきビールができたなどと書いてあるから、ああ伊藤礼という男は狩猟の道に深く入りこんでいたんだな、狸を食べたりするぐらいだから道楽者だつたんだなと解釈されるのである。

『パチリの人』というのもある。題名のパチリというのはしばしば写真機のシャッター音、パチリと誤解されるがそうではない。碁である。碁石を碁盤の上につときパチリと音がする。それに由来する。この本を読むと、ああ、伊藤礼という男は碁キチなんだなということが分かるのである。

わたくしが自転車にのめり込んでいたということを知らせる『大東京ぐるぐる自転車』というのもある。『大東京ぐるぐる自転車』というのはだれでも自転車にのるとペダルをぐるぐる回すからそういう題名が生まれたのである。この書物を読むひとは、年寄りのくせに自転車に乗って喜んでいるこの男は道楽者だなと考えるのである。

もうひとつ、農業に深い関心を抱いて、この道に多大の時間と金銭を投じてきたことを物語る『耕せど耕せど』という本もある。これを読むひとはこの伊藤礼

だつた。そのために両親はこの子を死なせては可哀そうだとずいぶん心配してくれたのである。

わたくしは病院に入院させられ、毎日ストレプトマイシンという注射薬をお尻に一本注射された。それが六十日つづいたのである。

ストレプトマイシンという薬は夢の特効薬だつた。これは戦争末期にアメリカで開発された薬で、アメリカ占領軍の手で昭和二十四年に日本に持ち込まれた。最初は量が限られていて、その限られた量が日本中の結核療養所に分配された。日本の医師たちにとってそれは未知の薬だったが、使ってみると魔法のような効力を発揮した。毎日三十八度とか三十九度の高熱を發して手のほどこしような患者が、一本の注射で翌日は熱が下がつたのである。しかし各療養所でその恩恵に浴したのはほんのひとにぎりの患者だつた。当然、闇のルートでストレプトマイシンは出回り始めた。わたくしの友人にも、昭和二十六年、闇のストレプトマイシンで命をとりとめたのがいた。かれは吉祥寺に住んでいたのだが当時一本のストレプトマイシンが宅地の一坪の値段だつたという。かれのようにお金が都合つくひとは生き延びるチャンスを拾うことが出